翻訳

ドイツ社会民主党（SPD）150年
―社会主義的労働者文化と民衆スポーツ相互間の労働者トゥルネン・スポーツ運動[1)]―

ミヒャエル・クリューガー[i]著，有賀　郁敏[ii]訳

はじめに

労働者スポーツ運動について語るならば，この運動は通常，ドイツ帝国が創設されて以降，ヴァイマル共和国の中で生起し，イデオロギー的には社会主義・共産主義政党の一部であるか，あるいはそれらに属していたトゥルネン・スポーツ協会を指すと考えられている。しかし，トゥルネンやスポーツを実践していた男女の労働者のすべてが，こうした政党に組織されていたわけではない。全体としてみれば，これら労働者は労働者の概念のもとに理解され，たいていの労働者は政治的に活発な協会ではなく，専門的そしてスポーツ的に方向づけられたトゥルネン・スポーツ協会に組織されていたのである。

実際のところ，社会主義者鎮圧法がもはや延長されなくなった1890年以降になってはじめて，政治的な意味における社会主義的・共産主義的なトゥルネン・スポーツ運動が誕生した[2)]。それ以降，労働者トゥルネン・スポーツ運動は1933年まで，ドイツにおける組織的な身体運動，いわゆる市民的スポーツ運動，市民的なドイツトゥルナー連盟，宗派的なトゥルネン・スポーツ団体ならびに政治的，イデオロギー面で中立的な遊戯・スポーツ諸団体とならんで強力な組織母体を形成していった。概ね100万人以上の人びとが労働者トゥルネン・スポーツ協会に組織された。国民社会者主義者は労働者協会を禁止したが，その中にはトゥルネン・スポーツ組織も含まれていた。これら組織の室内ホールや運動場，そして全国的な範囲において協会の財産が没収された。国民社会主義者は５月１日の「労働の日」を「国民的労働の祝日」とした（Steffens, S. 17）。第２次世界大戦後，労働者スポーツ運動は再生されなかった。それは，1920，30年代に独自な労働者オリンピックを開催した国際労働者スポーツ運動についても同様である。他方でソヴィエト連邦に指導された社会主義・共産主義国家は，オリンピック運動の中に参入され，1952年に国際的なオリンピック競技会に初めて参加することになった。

これまで見てきたように，労働者スポーツ運動は事実上，過去の歴史である。制度的な継承がなされなかった。しかし，このことは労働者スポーツの価値，目的，あるいは一般的に言うところの「意味」が今日のスポーツ理解の中に取り入れられなかったということを意味するものではない。

そもそも労働者スポーツ協会はなぜ存在したのだろうか。それらは市民的なトゥルネン・スポーツ協会と異なっていたのだろうか。

ⅰ　ミュンスター大学スポーツ科学インスティテュート教授
ⅱ　立命館大学産業社会学部教授

１．労働者トゥルネン協会の端緒について

ドイツ社会民主党（SPD）の起源は，フェルディナント・ラサールと1863年にライプツィヒで設立された全ドイツ労働者同盟に由来している。同時期，すなわち，いわゆる帝国設立までの数十年の間に，ドイツでは数多のトゥルネン協会が誕生した。1863年には，同じくライプツィヒで３回目の大規模な国民的なトゥルネン祭が開催されたが，その際にドイツにおけるすべてのトゥルネン協会の統轄組織ともいうべきドイツトゥルナー連盟（DT）が創設されたのである[3)]。DT 傘下の協会には多数の労働者と手工業者が属しており，少数の親方と自営業者も含まれていたが，彼らはたいてい若い手工業職人だった。これらの階層は，当時，トゥルネン協会員の約60％を占めていた。つまり，ラサール派の労働者教育協会の設立に際しても，有力なターゲット集団であった階層を対象としていたのである。1000名以上の会員を有するトゥルネン協会を統轄していたアルヴィン・マルテンスは，1862年，トゥルナーと呼ばれていた者は「ほとんど例外なく手工業職人であり」，「啓蒙的な貴族階級」や「知識人」は協会を後援し，折に触れて指導していたと記している（Martens, 1862, S. 32）。

こうした「知識人」の一人がボン出身の社会哲学者にしてトゥルナーであった社会主義者のフリードリヒ・アルベルト・ランゲ（1828-1875）であった[4)]。「トゥルネン協会への労働者の参加」に関する彼の記事の中で，ランゲは次のような計算をしている。すなわち，トゥルネン協会の会員は，（1864年のトゥルネン協会統計によれば）平均して59.3％が「手工業者」と呼ばれている人びとであり，7.7％が賃労働者の類であり，その中に「工場労働者，日雇い労働者等」が含まれていた。彼は第１に，この低いパーセンテージを残念に思っていた。彼はこの原因を―今日われわれが知っているように―ドイツにおける工業化の本来的到来が実現しておらず，それゆえ工場労働者がマルクスの意味における社会的階級として実際には未だ成熟していなかった点に求めていた。彼は第２に，とりわけ多くの「知識人」が存在している協会では，賃労働者の数は最も少ないと明言している。労働者の指導者であるラサールによって主張された「学問と労働の同盟」は，トゥルネン協会では未だに貫徹されないと，ランゲは考えていた。その責任を彼は以下のような「知識人」に負わせたのである。すなわち，彼らは労働者に対して傲慢な態度をとり，集会における「標準ドイツ語の単独的な支配」に至るまで，知識人の教養の優位性を利用したのだ，と。こうした態度は「通常，乏しい学習しか受けていない賃労働者にとっては手工業者以上に参加を逡巡させることになった」。

このような理由から，トゥルネンの班が労働者教育協会の中に多く設立されていったのだろう。しかし，ランゲはプロイセン・ドイツ社会における切迫しつつあった労働者問題の解決策として，固有の社会主義労働者トゥルネン協会の設立を支持しなかった。彼は「トゥルネン協会における諸身分の融合の社会的効果こそが，通常人びとが考えることができる最も好都合なこととみなすことができる」（S. 15）という見解だったのである。この点で彼はフランクフルトの急進的な労働者指導者であり，また全ドイツ労働者協会（ADAV）会長としてラサールの後継者であったヨーハン・バプティスト・シュヴァイツァー（1833-1875）の解釈とは明確に異なっていた。シュヴァイツァーは当時，フランクフルトトゥルネン協会の会長でもあり，またとりわけトゥルネン協会における軍事トゥルネンの導入に尽力していた[5)]。

ランゲは労働者の教育，身体教育の方法を越えて，彼らの自己認識の強化に期待をかけていたのであり，ブルジョア文化からの分離や社会主義革命を要請していたのではなかった。ランゲは次のように述べている。「私は労働者教育協会に属さず，不十分な学校教育のもとにあっても完全なる人格を発展させている多くの労働者を知っている。というのは，そうした労働者たちは，最初，トゥルネン協会のなかで

すばらしいパフォーマンスを通じて耳目を引きつけ，それから好感のもてる性格を通じて評価，愛され，そして最終的に自然で素直な思考を議論のなかで，その真価を十分に発揮させる術を知っている。また，トゥルネン協会における諸身分の融合の成果は，それゆえ一般的にトゥルネン場における活発で新鮮な活動そのものが優勢であって，協会が主たる成果を総会あるいは目的に都合のよい創立記念祭や舞踏会にそれほど求めないのだから，いっそう好都合なのである。一言で言えばトゥルネン協会が健全であればあるほど，労働者も繁栄するのである。」(S. 15)

ランゲは独自の労働者トゥルナー協会の育成に対して必ずしも厳格に対抗していたのではない。しかし，彼は政治的，イデオロギー的背景を度外視し，「高貴なトゥルネン術」の「教育的影響力」一般を重視していた。労働者，「とりわけ労働時間の大部分を息苦しい，そしてしばしば最も不健康な煙霧が充満している空間で過ごさなくてはならない工場労働者にとって」(S. 15)，トゥルネンの意味はあまりに軽視されている，とランゲは考えた。しかし，中心的な社会問題における前進，すなわち「労働時間の短縮」がなされない場合には，「トゥルネン術」あるいはトゥルネン協会のあらゆる教育的かつ肯定的な可能性は，思弁の域に止まっていた。この点が解決されない限り，「労働者大衆の下でのトゥルネンの普及など問題にならなかった」のである。初期の労働者トゥルネン運動のもう一人の主導者，すなわちザクセンの靴職人で後にラサール派のADAVの書記となったユリウス・ファールタイヒは，1904年に刊行された氏の「回想」の中で，1850年代と1860年代のトゥルナーの社会を以下のように叙述している。「トゥルナーは穏やかな民衆であった。彼らは年配あるいは若者，労働者あるいは徒弟でも，兄弟愛としての「君」を用いて相互に挨拶をした。彼らはその大部分が労働者身分に属しており，そしてその下では，少なくとも精神的な力動性を相対的に保持していた。このことは，当時，国民の事柄の発展を信じていた人びとは，トゥルネンの中に彼らのささやかな期待を見出していたのである。[6)]」

プロイセンにおける「労働者階級繁栄のための中央協会」の機関誌であった『労働者の友』では，1866年度刊の論説シリーズにおいて，労働者の日常生活における協会の意義が問題とされた。そこでは教育・自己形成協会とともにトゥルネン協会も考察の対象とされ，とりわけ労働者と手工業職人の社交的，社会形成的資質と喜びが育まれるとされた。ある論説記事では，年３回から４回のトゥルネン祭そして毎週数回の共同でのトゥルネン遠足が実施されているトゥルネン協会があったと記された。トゥルネンの模範演技会は労働者教育協会の春秋の祭の不可欠な構成要素となっていた。労働者教育協会では，トゥルネンは計算，筆記，読みそして簿記と同様，教育プログラムの一部であった。いずれにせよ，それはライプツィヒにおける1864年の労働者教育協会の協会総会で可決された共通のカリキュラム―もっとも，現地に適したトゥルネン協会が存在しない限りにおいてという補足付きであったが―の中に組み入れられたのである。

初期のトゥルネン・労働者協会に対するこのような考察を通じて，ドイツの1848年革命以降に展開された民衆運動としてのトゥルネンに，手工業職人と労働者が加わっていたことが明らかになった。この２つの階層は民衆・市民運動にとっての本質的なターゲット集団だったのである。仮にこの関係においてマルクス主義の専門用語を使用したいのなら，身体，身体諸力ならびに身体の健康，忍耐力そして作業能力が労働者の本源的「資本」であったし，あり続けていることは驚くべき事柄ではない。無傷，健康そして作業能力ならびに規律的な運動と身体的能力と熟練への配慮は，トゥルネン協会を組織し，そこで活動する手工業職人と労働者の根本的動機に支えられていたのである。

２．労働者トゥルネン協会の政治化

カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスか

らフェルディナント・ラサールそして先に引用したアルベルト・ランゲまでの労働者と労働者階級の代弁者となった市民的・知的オピニオンリーダーたちは，このようなトゥルネンと体操を通じた労働者階級の身体教育，健康そして休養を支持した。彼らはしかし，これらの運動に対する労働者協会の政治及びイデオロギーの問題に際しては考えが異なっていた。広範な動機も存在していた。すなわち，今日までトゥルネン・スポーツ協会の中軸に位置づけられ続けている事柄，同種の「協会」のもとでの他者との休養の必要と有効な余暇の普及の問題である。ランゲによって定式化された労働時間の短縮の要求は，社会的考慮において不可欠であるのみならず，それは工場と手工業職場における身体的に疲弊をもたらす労働を回復させ，身体と精神を再生させるための前提でもあった。労働時間の短縮と最終的に８時間労働日―それは国際的な労働運動の最古で最も重要な要求であり，またドイツにおいては周知のごとく，1928年に法的に制定された―の導入は，結果としてトゥルネン・スポーツ・労働者運動の全盛をもたらしたのである[7)]。それはとりわけ，第１次世界大戦後のヴァイマル共和国の時代に顕著となった。労働運動とともにトゥルネン・スポーツ運動もまた大衆運動へと成長したのである。

19世紀後半において，一方で経済，産業の発展，他方で社会的，政治的・イデオロギー的な差異あるいは多様性によって，市民的協会とプロレタリア的協会の間あるいは市民層とプロレタリア会員の間で協会内部の分裂が生じると，何人かの知的オピニオンリーダーたち，とりわけいわゆる講壇社会主義者たちは帝政時代までのトゥルネン協会における労働者と市民の社会的統一という理念を代弁した。他の者はブルジョアジーからの労働者階級の厳格な分離を唱えた。こうした状況の中で，トゥルネン協会における階層及びトゥルネンによる教育的に結合された力の融合というランゲの社会民主主義的ビジョンは実現しなかった。

1878年，社会民主主義者ではなかった２人の人物による皇帝ヴィルヘルム１世の暗殺計画が明るみ出た後，「鉄血宰相」ビスマルクは「社会民主主義者の公共の福祉を害する活動に対する法律」，いわゆる「社会主義者鎮圧法」を施行した。この法律によって，すべての社会民主主義的，社会主義的あるいは共産主義的組織が禁止された。集会を解散させることもできた。書籍，刊行物そして宣伝媒体は検閲され，また紙くずとなった。社会主義的協会や団体は，もはや設立することが許されなかった。この法律は４度，帝国議会で有効期限を延長し，1890年にようやく，ビスマルクの退陣とともに法的効力が失効した[8)]。

トゥルネン協会，とりわけドイツトゥルナー連盟（DT）の指導者は皇帝に忠実な「祖国の防塞」として理解されていたので，社会民主主義に共感した多くの労働者は，もはやDTの協会のなかで活動することに意義を感じられなくなった。「祖国を喪失した手工業職人にとってDTのなかに居場所はない」。ゲッツは鉄血宰相ビスマルクをよりどころに，このように語った。DTは社会主義的な考えをもつ労働者のDT傘下協会への編入を支援することはせず，社会的差別と烙印化を支持した。それにより，DT規約に基づき義務化されていた事柄，すなわち全国民がトゥルネン協会の中でトゥルネンの恩恵に関与していく歴史的機会を失ったのである。

DTが皇帝に対して忠誠かつドイツ国民的であり，加えて労働者敵対的態度ゆえに支払った対価は高額であった。多くの労働者は1891年の社会主義者鎮圧法失効後，DT傘下の協会から脱会し，独自のトゥルネン協会を設立した。一つの事例は，ブランデンブルクの男性トゥルネン協会であり，この協会はもっぱら社会民主主義者あるいは社会主義者によって構成されていた。彼らは1892年に社会主義メルキッシュ・トゥルナー同盟を設立した。1893年，ゲラにおいて労働者トゥルナー同盟（ATB）が誕生したが，その設立には4000名が参加し，また機関誌として『労働者トゥルネン新聞』（ATZ）が刊行された[9)]。

これらの協会の新たな会員を獲得するために，労

働者スポーツ幹部の側からの強力なアジテーションが開始された。たとえば同誌1902年の号には次のような記事が掲載されている（S. 98）。「DTに属している，われわれとともに考え，感情を同じくする労働者たちよ。DTの中にいる10万人もの多くの同志たちよ。君たちの前進を試みているトゥルネン・階級の同志たちを当局へ告発し，中傷し，君たちの世界観をないがしろにしようと企てているDTの本性を見るにちがいない。君たちには青ざめたプロレタリアの顔の中に怒りの紅潮がみえないのか。君たちは一方で労働組合や他の組織で活動し犠牲を払い，また他方で，君たちの苦悩や利益に対して同情も理解もできないような人びとのために，組織をつくることができるのか。労働者トゥルネン運動に対して道理のない道具として悪用されることを拒絶しよう。最後に君たちよ，もう一度立ち上がれ，そして，われわれに対してではなく，われわれとともに闘おう。」

狭義の意味におけるATBの政治的目標と動機は，少なくとも第1次世界大戦の黎明期までは，社会的排除に対して労働者を統合し，諸力を束ね，よりよい健康的な生活環境を擁護し，そして独自の社会的，文化的環境を創造するといった利害の背後に退いていた。労働者文化はヴィルヘルム社会における除外された領域であった。労働者のトゥルネン協会はそこに属していたのである。そこでは確かに市民的なDT傘下の協会と同じようにトゥルネンがなされ，競技もあり，遠足もあり，合唱もあり，祭典もあり，議論もなされた。しかし，それは自身の範囲のみでなされ，しかもDTや他の市民的諸協会や団体に対して意識的に境界を設けた。政治も重要な役割を演じた。DTが国民的な団体として自認し，振舞えば振舞うほど，労働者トゥルネン協会は社会主義的協会として，特別なプロレタリア・社会主義文化あるいは身体文化の担い手として自認した。とはいえ，労働者トゥルナーはトゥルネン運動の伝統と理想に義務を負っていると感じていないのではなかった。「フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン」の肖像は，DT傘下のトゥルネン協会あるいは1921年以降，「一般ドイツトゥルナー同盟」に組織された「自由な」トゥルナーの協会と同様に，労働者トゥルネン協会の会旗に誇らしく刻印されたのである。ヤーンのモットーである，新鮮に・敬虔に・愉快に・自由には，ATBによって新鮮に・自由に・強力に，そして誠実に，に改変されたが，このことはいわばブルジョア的価値を表現したものである。また，「自由万歳！」は「グート・ハイル！」から援用したものだが，ブルジョア的なDT傘下のトゥルナーも，それが社会主義者によって叫ばれないのであれば，この言葉に賛同していたと理解することができよう。

3．成長と分裂

ヴィルヘルム的官僚国家とDTによる執拗な妨害にもかかわらず，労働者トゥルネン協会における協会や会員数は第1次世界大戦前に大幅に増大した。とりわけATBの効果的なアジテーション活動の効果が大きかった。1914年，2411の協会に186,958人の会員が属していたが，その中で13,370人が女性のトゥルナーであり，32,358人が徒弟職であった。もっとも，この数字は1913年に約250万人の労働者が自由な労働組合に組織されていたことを鑑みれば，思われるほど大きくはない（Steffens, S. 133）。たとえ政府ならびにDTの側からATB協会の青少年活動を妨げようと再三試みられていたにもかかわらず，労働者トゥルネン協会では子どものためのトゥルネンも実施されていた。DT会長のゲッツは次のことを心配していた。「社会民主主義は，われわれの青少年からあらゆる道徳的なよりどころを奪いとる」。それゆえこれらの協会に対しては，青少年活動を禁止しなくてはならない，と[10]。しかし，それは現実とは異なり，ATBトゥルネン協会の包括的，価値ある教育的，社会的活動にとっての侮辱を意味していた。というのは，これら労働者協会はゲッツによって嘆かれた若き労働者の「道徳的粗暴性」と有効かつ効果的に立ち向かう数少ない機関の一つであった

からである。トゥルネン協会での活動，共同の運動，スポーツ的な成果，相互の実践的な連帯は，労働者たちに確固たるよりどころ，社会的承認，そして労働者と若年労働者にとって絶望的な社会的，経済的状況に対峙すべき自覚を提供したのである。

ドイツ第２帝政が第１次世界大戦終了とともに崩壊し，1918/19年革命後に社会民主主義政府が権力を獲得すると，労働者組織，そしてまたATBの立場も強化された。SPDと労働者組織は，ある意味では国家を担う機関となった。しかし，それらは「社会的に」承認されたものではなかった。ドイツにおける様々な市民層間の溝は解消されることはなかった。それとは反対に，階層間の違いや経済的格差は克服しがたい政治的，世界観的・イデオロギー的差異をもたらした。ブルジョア的トゥルネン・スポーツ組織が政治的に「中立」を宣言―しかし実際は，ブルジョア的で「中立的」利害を支持していたが―した一方で，労働者トゥルネン・スポーツ運動は社会主義を公言し，「階級を自覚した労働者のトゥルネン運動」，「政治的トゥルネン運動」として理解されたのである[11)]。

政治的確信と社会主義的理想の共有のもと，労働者にあってはトゥルネンとスポーツをめぐる身体文化的対立は，ブルジョア陣営ほど強く意識されなかった。ATBは1919年，スポーツ的な身体運動を同盟の規約の中に取り入れ，組織の名称を労働者トゥルネン・スポーツ同盟（ATSB）へと改名した。同時に当同盟は労働者に対してブルジョア協会からの離脱を呼びかけた。帝国ドイツ体育委員会（DRA）との連携は拒否され，ブルジョア協会と労働者スポーツ協会における二重会員は不可能となった。共同のトゥルネンあるいはスポーツ的催しも実現しなかった。ATSBの同盟総会は，1926年，ハンブルクにおいてブルジョア的トゥルネン・スポーツ協会や団体との協力を拒絶した（Beyer, 1982, S. 682）。もっとも，共同を阻止できなかった諸団体の公式な政策では，幾つかの都市やゲマインデで労働者スポーツ愛好家とブルジョア的スポーツ愛好家との平和的共存と協力的連帯が存在した，とある。

今や労働者トゥルネン・スポーツ協会は，特殊なプロレタリア的・社会主義的身体文化を育成するために，帝政時代との比較において多くを獲得した活動範囲を利用した。労働者トゥルネン・スポーツ協会の会員数は急激に増大した。戦後，1919年段階で約19万人の会員数であったが，すでに1922年では労働者トゥルネン・スポーツ運動は約110万人の会員を有する最高水準へと到達した。その水準は1920年代末まで僅かな減少で推移することができた[12)]。ブルジョア的なスポーツと同様に，労働者スポーツにおいても多くの新しいスポーツ・遊戯・体操の諸活動が普及していった。労働者アスリート同盟から自転車同盟「連帯」まで，新たな連合，協会そしてグループが加わった。労働者スポーツ連合体が組織され，また書籍，新聞，機関誌が編集された。そのうち最も有名なものは『労働者トゥルネン新聞』であったが，こうした機関誌を通じて労働者スポーツの「イデオロギー」も広められた。1926年，ATSBはライプツィヒにおいて，事務所と印刷所を備えた立派な同盟学校を竣工した。青少年労働に力点が置かれたが，そこでは労働者トゥルネン・スポーツ協会が模範となった。自転車同盟「連帯」は，ドイツ全体において5000以上の組織と35万人の会員を有し，独自の自転車工場「フリッシュアウフ」をオフェンバッハに設けた。1926年，26,000以上の自転車とオートバイを生産した（Teichler/Hauk, S. 248）。ATSBは，1922年にライプツィヒ，1929年にニュルンベルクで大規模な「同盟祭典」を開催した。諸団体は，国際的なスポーツ組織づくりに貢献し，また労働者オリンピックにも参加した。1925年，フランクフルトにおいて「ルツェルン・スポーツインターナショナル」（LSI），後の「社会主義労働者スポーツインターナショナル」（SASI）が，第１回国際労働者オリンピックを開催した。SASIは全世界の社会民主主義的，社会主義的労働者スポーツ組織の連合体であったが，ソヴィエト連邦の共産主義スポーツとの共同には反対を表明した。

4．労働者スポーツの目的と内容

第１に，AT(S)Bにおけるトゥルネン・スポーツ活動は，本質的にブルジョア協会のそれとは異なっていなかった。そこでのトゥルネンでは，シュピース式スタイル，すなわち徒手・秩序運動，マスゲーム，器械運動が行われた。また大規模なスポーツ競技会，とりわけサッカーが好まれ，その結果，集中的な共同的体活動が開花した。労働者スポーツの目的は，身体教育的な考慮において，以下のようなブルジョア的スポーツと同種のものであった。すなわち，労働生活の苦難を改善し，また健康を阻害する状況を改善するための，健康，身体強化，抵抗力の育成である。初期（1893年）のライプツィヒ自由トゥルネン連合の宣伝文書には，次のように記されている。とりわけ若年の労働者は「規則的，徹底したトゥルネンの運動を通じて（…），その全生活のために健康的で力強い，抵抗力のある身体を我がものにするだろう。その身体は，青年期のしばしば骨の折れる作業による対抗運動をまったくしないせいで弱められ損なわれてしまうことになる身体よりも，後年のプロレタリア生活の諸々の苦労に耐えうるものとなるのである。加えて，彼らはそれによって兵役の際，上官の理不尽な言動や虐待をのがれるだろう。（…）彼らは彼らが居酒屋やそれ以外の場所で過ごす以上に，その自由な時間をトゥルネンの同僚たちとともに快適かつ教育的なやり方において過ごすであろう。（…）彼らは身体的に熟練した，そして立派な労働者がその職業におけるそれぞれの操作を有益かつ迅速に遂行することを通じて，身体的に鍛えられていない労働者よりも，自身の労働の分野のために何倍もの長所を獲得するだろう。」（Teichler, 1980, S. 467）

労働者スポーツの基本的目的は1911年の『労働者トゥルネン新聞』の論説において，より明確に記された。おそらくこの論説は1919年まで労働者スポーツと身体育成のための中央委員会書記であったフリッツ・ヴィルドゥンクによって書かれたものである。「身体運動は退屈な平日労働における休日的な身体養生である。（…）われわれは，身体への注目と高い評価に対する身体運動の育成を通じてわれわれの同調者を教育しようと試みたい。それによって彼らは理性的かつ自然的に生活し，また大都市の文化人の低劣で堕落した習慣を拭い去るのである。（…）それゆえ，身体運動の手段を通じて社会的変革を直接引き起こすことが問題なのではなく，身体運動は経済的に自立している労働者階級の存在に新たな中身を提供することに寄与するだけである。それは二重の見地からである。第１に，身体運動は労働者の健康を強化し，病気から遠ざけそしてそれによって完全に自然な方法で人生の幸福を増大させるべきこと。他方で第２に，―第１の結果として―より高度な人生の幸福は健全な思考・生活様式へと行き着くべきであり，また悪弊な習慣の回避を自明なものとするべきである。最終的に健康な身体の基盤にうえに健全で高貴な精神生活が実現し，そして一致結束した繋がりにおいて人間性の高度な発展のために協同で参加すべきなのである。しかし，このことはすべての労働者階級がその経済的解放を同じテンポで実行するときにのみ現実化されるだろう。」（Teichler, 1980, S. 468）

労働者スポーツのこの基本的教育目標は，帝政時代に定式化された。しかしそれはヴァイマル共和国の時代でも保持され続けたのである。いずれにせよ，新しい政治的目標が付加され，労働運動，労働者スポーツ運動内部においてこの目標とトゥルネンとスポーツを通じた社会主義の正しい道をめぐって見解の相違が先鋭化した。

一つの見解は，反動的と見なされたブルジョアスポーツに対し明確な一線を画すものであった。すなわち，ブルジョアスポーツの競争原理，業績原理，記録主義，貴族的な「紳士的スポーツ種目」，プロスポーツにおける資本主義的なスポーツ主義，そして最終的には軍国主義，ナショナリズム，排外主義そしてファシズムによるトゥルネンとスポーツの横領

に対してである。これらの非難はとりわけ DT に対して向けられた。スポーツそのものではなく，資本主義におけるスポーツのみが批判された。それはブルジョア社会の「没落」と「衰退」の表現なのである。一方では社会主義の社会とそれと照応した社会主義的スポーツの前進が強調された[13)]。

もう一つの見解では，プロレタリア身体文化の固有なアイデンティティを創造し，定式化する努力が強調された。確かにオールタナティヴなプロレタリア身体文化を実践において貫徹することは成功しなかった。なぜなら，労働者はこれらのスポーツ種目，そしてブルジョア的手工業者とサラリーマンと同様に，競技と競争，遊戯，体操を協会の中で育みたかったからである。これら労働者によって行われた身体運動は，今や労働者スポーツイデオローグによって「プロレタリア的」「社会主義的」と呼ばれたのである。大規模なプロレタリア革命の一部として，身体運動は社会主義に貢献しなくてはならなかった。

このことをめぐり労働者スポーツ運動内部で論争が生じた。一方の側，すなわち穏健的，改良主義的勢力，すなわち SPD と親密な関係にあり，また ATSB ならびに労働者スポーツ・身体育成中央委員会（ZK）において組織された勢力は，身体運動とトゥルネンとスポーツを労働者の生活の質の改善の道具として利用したかった。もう一方の側，すなわち共産主義思想の影響下にあり，ドイツ共産党（KPD）と親密な関係にあった勢力は，スポーツを共産主義革命の意味において労働者階級に影響を及ぼし，最終的に軍事スポーツにも寄与するためのアジテーション手段として見なしていた。

1928年，ATSB と ZK に組織されていた社会主義的，社会民主主義的トゥルナーとスポーツマンは共産主義的赤色スポーツ愛好家から分離した。共産主義者が個々の労働者スポーツ愛好家と協会全体の中へ共産主義的に侵入し，こうした方法によって労働者スポーツ運動全体ないし労働者文化運動全体を KPD の影響力下に置こうと再三試みたことを受けて，社会民主主的な ATSB の指導部は，ライプツィヒにおいて1928年に行われた第16回同盟総会の場で，もはや共産主義扇動家を同盟から排除する動議を提出せざるをえなかった。動議は賛成多数で可決された。それにもかかわらず，分裂の決定は労働者スポーツ運動全体の明確な弱体化を意味していた。共産主義的トゥルネン・スポーツ協会は，1930年以降，赤色スポーツ統一闘争共同体（KG）を結成した。国際的な舞台では，すでに1920/21年に社会主義と社会民主主義の労働者スポーツの分裂が生じていた。社会主義労働者スポーツインターナショナル（SASI）は，1921年，モスクワにおいて設立された共産主義的な「赤色スポーツインターナショナル」（RSI）と対立していた。この組織はスパルタキアードによって独自の国際的スポーツ祭典文化を構築しようと試みていた[14)]。

一方で SPD に親近感をもつ協会と他方で KPD と結びついた共産主義的協会間に見られた社会主義陣営内部における労働者スポーツの分裂は，ブルジョア的なトゥルネン・スポーツとプロレタリア的労働者スポーツ間のそれと比べてみても大きかった。労働者スポーツとブルジョアスポーツ間の深い溝にもかかわらず，両者は統一した政治的なイニシアティブのもとで身体運動とスポーツの国家的・公共的促進のために運命をともにしたのである。ヴィルドゥンク―ついでにいえば後の連邦議会の女性議長（1972-1976）アンネマリー・レーガー（1919-2008）の父―ならびに会長で1930年からドイツ帝国議会議員のコルネリウス・ゲレート指導の労働者スポーツの統轄組織，労働者スポーツ・身体育成中央委員会（ZK）とカール・ディームとテオドーア・レヴァルトの指導下のブルジョアスポーツの統括組織 DRA は，たとえば1919年に運動場あるいは日々のトゥルネンの問題に関して，同様の内容の要求を唱え，そして覚書を作成したのである。（Beyer, 1982, S. 662）

5.「自発的な基盤における」統一スポーツの終焉と再生

第２次世界大戦とナチスによる残虐行為が終焉した後，スポーツは協会のなかで再び急速に成長した。戦争，捕虜あるいは強制収容所で命を落とすことなく，僅かに生き残った労働者スポーツ愛好家とかつての労働者スポーツ幹部は，新しいスポーツ運動を労働者スポーツの精神で根拠づけることが最も適していると考えていたように思われる。しかし，状況は異なっていた。東ドイツでは，協会の設立が国家政党 SED によって全般的に禁じられた。また，かつての労働者トゥルネン・スポーツ協会はもはや再生されなかった。西ドイツでは，新しいスポーツ運動は，第３帝国において禁止され，追撃された労働者スポーツ愛好家が先頭に立たなくてはならないという意見と希望が優勢であった。とはいえ，フリッツ・ヴィルドゥンクやオスカー・ドレースあるいはハインリヒ・ゾルクのようなかつての労働者スポーツ運動の幹部は，独自の労働者スポーツ協会や団体の設立に反対を表明した[15)]。彼らはむしろ，「自発的な基盤」におけるドイツスポーツの統一的な統轄組織，すなわちドイツスポーツ連盟（DSB）の創設に協力した[16)]。重要な理由の一つは，もはや国際的な労働者スポーツ運動は存在せず，社会主義諸国がオリンピック運動における承認に向けて努力していた点にあっただろう。ほどなくして，ソ連と東ドイツのアスリートたちの成果がオリンピック競技会を独占するようになった。かつて労働者スポーツ運動の幹部から資本主義的，非人間的対象としてレッテルを貼られた高度な競技力スポーツは，ドイツにおける最初の労働者・農民国家のプロレタリアート独裁にとって寵愛の対象となったのである。それと対比すれば，東ドイツでは1950年代において，依然として国家の本質的課題として宣伝された国民的・大衆スポーツないし社会主義的身体文化は忘れ去られていった。

資本主義的な西ドイツでは，それに対して，ドツスポーツ連盟で再び設立されたトゥルネン・スポーツ協会において，多かれ少なかれ労働者スポーツ運動の古い（社会民主主義的）目標と理想が高揚していった。すべての人のためのスポーツとトゥルネン，スポーツの第２の道，大衆・余暇スポーツ，リハビリ・健康スポーツ等は，今日，近代的スポーツ運動の自明的な構成要素である。そしてそれらすべては，依然として協会の会員の社会的でボランタリーな参加を前提とした絶対的な有益な価値である。戦後，ナチスによって迫害された社会民主主義者ヴァルター・コルプ（1902-1956）がドイツ体操家連盟の初代会長（そしてフランクフルト市の市長）に就任したことは，1945年後の（西）ドイツのスポーツが，労働者トゥルネン・スポーツ運動の社会民主主義的理想を求めなくてはならないという期待を象徴あるいは体現している。社会民主主義者のライナー・ブレヒトケンが13年間，ドイツ体操家連盟会長に就任していることは，大衆スポーツ的に組織された（西）ドイツのトゥルネン・スポーツ運動における労働者スポーツのこの社会民主主義的目標の後年における勝利を象徴している。

古い，伝統的な社会的ミリューが解体し，そして経済と社会の近代化が新たな多様化した社会構造をもたらした後に19世紀の F.A. ランゲのような社会改革家によって夢見られた事柄が達成されたのである。すなわち，トゥルネン・スポーツ協会では社会的諸階層が混在した構成となったことである。スポーツは原則的に境界が無く，ルールだけがある。スポーツはすでに社会的排除と富の象徴ではない。貧富，老若，男女，ドイツ人と非ドイツ人，障害者と健常者，これらの人びとは第１に健康のために，第２に競技を行い，第３に楽しみを享受したい。現実においては，時として希望に満ちた，理想的な印象を与えないことが存在しているとしても，これらすべてのことが協会の中で，スポーツ場でそして体育館で演じられている。確かに何人かの知識人，あるいはそれに賛同する者たちが先頭にたってはいるも

のの，ドイツにおける91,000以上の協会，2,700万人以上の会員の下で，スポーツは社会のあらゆる階層を包括している大衆・国民運動であるとみなすことができる。

それらはしかし，昨今，この十数年来，商業化の危惧が強まっている。人間の遊戯・スポーツ欲求を資本主義的活用に与しようと，公益的な協会や団体と並んで，民間の経営で組織されたスポーツ・フィットネススタジオにおけるスポーツがさらに力を増してきている。競技力スポーツは，今日，たいていは国家から高額な補助金を提供された管轄範囲あるいは多額の金を稼いだり失ったりする市場に依拠している。100年前の階級自覚的な労働者スポーツ愛好家は，この展開を無批判に甘受するわけにはいかないだろう。

このスポーツの危機と問題はしかし，その資本主義化の中だけに存在しているのではない。労働者スポーツ運動の幹部が絶えず大きな価値を見出していた事柄，すなわち連帯，人間性，そしてエゴイズム，消費主義，物質主義に代わる社会的協同という原理や道徳的基準の喪失もまた問題なのである。

注

1）　この論文は，2013年５月22日，「夜を抜けて光へ？―1863年から2013年までの労働運動の歴史」と題する展覧会の一連の催しの一環として，マンハイムの科学博物館で2013年５月22日に行われた講演をもとにしている。展覧会そのものに関しては，ホルスト・シュテフェンス編集の以下の包括的なカタログを参照。H. Steffens (Hrsg.), Durch Nacht zum Licht ? Geschichte der Arbeiterbewegung 1863-2013, Mannheim 2013.

2）　労働者トゥルネン・スポーツ運動史に関しては，1970年以降，数多のドイツ語による研究が刊行されているが，H. ユーバーホルストの著作（H. Ueberhorst, Frisch, frei, stark und true. Die Arbeitersportbewegung in Deutschland 1893-1933, Düssldorf 1973）によってはじめられ，H. J. タイヒラー／G. ハウク編集の著作（H. J. Teichler/ G. Hauk (Hrsg.), Illustrierte Geschichte des Arbeitersports, Berlin 1987）まで存在する。レジュメの類は Die rote Turnbrüder. 100 Jahre Arbeitsport. Marburg 1995 があり，ATSB 100周年誌から引用されている。史料と文献の状況に関する最近の概観を Teichler/ Jens Klocksin による Arbeiter- Turn- und Sportbund (1893-2009). Beständ im Archiv der sozialen Demokratie und der Bibliothek der Friedlich- Ebert- Stifung : mit einem Bestandesverzeichnis der Bibliothek des Sportmuseums Leipzig. Bonn 2012 が提供している。本格的な史料はボンにあるフリードリヒ・エーベルト財団の社会民主主義文書館に存在する。史料にも基づいた研究は，ライナー・フリッケによる研究：Spaltung, Zerschlagung, Widerstand. Die Arbeitersportbewegung Würtembergs in der 20er und 30er Jahren. (Institut für Sportgeschichrte Baden-Würtemberg e. V., 1). 1. Aufl. Schorndorf 1995，ヘルベルト・ディールカーによる研究：Arbeitersport im Spannungsfeld der Zwanziger Jahre. Sportpolitik und Alltagserfahrungen auf internationaler, deutscher und Berliner Ebene. (Schriften des Fritz-Hüser-Instituts für Deutsche und Ausländische Arbeiterliteratur der Stadt Dortmund: Reihe 2 Forschungen zur Arbeiterliteratur, 6.). 1. Aufl. Essen 1990，ならびにアイケ・シュティラーによる研究：Jugend im Arbeitersport. Lebenswelten im Spannungsfeld von Verbandkultur und Sozialmilieu von 1893-1933. (Arbeiterkultur und Arbeiterbewegung, 26.). 2. Aufl. Münster 1995 によって提供されている。国際的な労働者スポーツ運動は歴史的にはジェームス・リオーダンによる研究：Sportmacht Sowjetunion (Reihe päd.-extra-Sport.). Bensheim 1980 ならびにアルント・クリューガー／ジェームス・リオーダンによる研究：The History of worker sport. Champaign, Ⅲ 1996.　さらにアンドレ・グノーによる研究：Die Rote Sportinternationale, 1921-1937. Münster, Hamburg, Berlin 2002 によって探究されている。

3）　個々の状況に関しては，M. クリューガーによる研究：Körperkultur und Nationsbildung.

Die Geschichte des Turnens in der Reichsgründungsära; eine Detailstudie über die Deutschen (Reihe Sportwissenschaft, 24.). Schorndorf 1996を見よ。ライプツィヒのトゥルネン祭に関しては，S.330-339.

4） ランゲは広義の意味において「講壇社会主義者」に分類することができる。穏健派は社会民主主義的に順応し，ヴィルヘルム帝政の改革に期待をかけたビスマルク帝国の知識人が，そのように称された。以下の研究を参照。Lange, Friedrich Albert (1886). Die Beteiligung der Arbeiter an den Turnvereinen. Die Arbeit 1, S. 10-15.

5） シュヴァイツァーの伝記に関しては以下を参照。Fritz Koch, Schweitzer, Johann Baptist, in : Klötzer, Wolfgang/ Hock, Sabine/ Frost, Reinhard (Hrsg.), Frankfurter Biographie. Personengeschichtes Lexikon. (Veröffentlichungen der Frankfurter Historischen Kommission, 19,2). Frankfurt am Main 1996, S. 356-366.

6） Julius Vahlteich, Ferdinand Lassalle und die Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung. München 1904, S. 9f.

7） 限定条件に関しては，ヴェルナー・プルンペの研究を見よ。Werner Plumpe, Kapital und Arbeit in Deutschland von der Mitte des 19. Jahrhunderts bis zur Gegenwart, in : Steffens, Horst (Hrsg.), Durch Nacht zum Licht ? Geschichte der Arbeiterbewegung 1863-2013. Mannheim 2013, S. 386-407. 1日8時間労働制に関しては，S. 393.

8） この点に関して，また労働者運動の歴史全般に関して詳細に論じたものとして，Helga Grebing, Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Von der Revolution 1848 bis ins 21. Jahrhundert. Berlin 2007. 社会民主主義とスポーツの関係全般に関しては，Frank Engelhausen, Sozialdemokratie und Staat, in : Steffens, Horst (Hrsg.), Durch Nacht zum Licht ? Geschichte der Arbeiterbewegung 1863-2013. Mannheim 2013, S. 408-423.

9） Edmund Neuendorff, Geschichite der neueren deutschen Leibesübung vom Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart. In 4 Bänden. Dresden 1936, Band Ⅳ, S. 521ff..

10） Hans Joachim Teichler, Arbeitersport als soziales und politischen Phänomen im wilhelminischen Klassenstaat, in : Ueberhorst, Horst (Hrsg.), Geschichte der Leibesübungen. Band 3/1, Berlin 1980, S. 443-484, hier S.450.

11） Erich Beyer, Sport in der Weimarer Republik, in ; Ueberhorst, Horst (Hrsg.), Geschichte der Leibesübungen. Band 3/2, Berlin 1982, S. 657-700, hier S. 681, Teichler, Arbeitsport.

12） Carl Diem, Vereine und Verbände für Leibesübungen (Verwaltungswesen). (Handbuch der Leibesübungen, 1.). Berlin 1923, S. 92ff.; Neuendorff, Band 4, S. 643.

13） Fritz Wildung, Arbeitersport. Berlin 1929, S.54.

14） 個々の点に関しては，ディールカー（注２）ならびにグノー（注２）参照。

15） 1945年以降，オーストリアとの差異において，なぜ連邦共和国の中に独自の労働者スポーツ運動が存在しなかったのかという問題は，とりわけ注２にある記念誌において扱われている。

16） 1945年以降のドイツスポーツの再建の歴史に関しては，Ommo Grupe (Hrsg.), Die Gründerjahre des Deutschen Sportbundes. Wege aus der Not zur Einheit. Schorndorf 1990で論じられている。

訳者付記

本論文は注１にも記されているように，2013年にマンハイムで開催されたドイツの労働運動に関する展覧会（「夜を抜けて光へ？―1863年から2013年までの労働運動の歴史」）の一環として組み入れられたミヒャエル・クリューガー教授の講演をまとめたものである。この論文でクリューガー教授は労働運動そのものではなく，それと深い関係にあった労働者スポーツ運動を考察の対象にすえている。ドイツにおける労働者スポーツ運動の歴史に関しては，これまでH. ユーバーホルストをはじめ，とりわけH.J. タイヒラーらの一連の研究成果が存在しており，本論文ではそれらを踏まえながらも，労働者（トゥルネン）スポーツ運動とブルジョア的な（トゥルネン）スポーツ運動の分岐・対抗あるいは相互浸透等の状況を19世紀中葉以降の協会運動の歴史を通じて解明しようと試みられている。クリューガー教授がF.A. ランゲの思想に注目しているの

も，戦後（西）ドイツのDSBを性格づけている，ある種階級融合的な国民スポーツ運動を先取りしたものと評価しているからであろう。本論文を通じて，ドイツでは労働者スポーツ運動への学問的関心が今日においても衰えていない点をうかがい知る事ができよう。

日本では現在に至るまで勤労者をはじめとする国民のスポーツ権の確立を重視し，労働者スポーツ運動としての役割をも果たしてきた新日本スポーツ連盟が存在している。労働者スポーツ運動史への着眼という点では，唐木國彦氏，上野卓郎氏そして切刀俊雄氏らによる先駆的な研究があり，この分野における今後の研究成果に期待したい。

最後に，本論文の本誌での翻訳を了解してくださったミヒャエル・クリューガー教授に対し心より感謝申し上げたい。